

聖地のこどもニュース

# オリーブの木

No. 87

2023年2月



来日したヤクープ・ガザウィ。明治大学を訪問、キャンパス見学を終えて。岸 磨貴子准教授と。

日頃より皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

1月末、当NPOの現地スタッフ、ヤクープ・ガザウィが3年半ぶりに来日しました。役員たちと今後の活動を話し合い、また日本の実情をより深く理解するのが目的です。久しぶりに大好きな寿司やラーメンを楽しみ、プロジェクトOB/OGや巡礼者の方々と再会を喜び合いました。自作のパレスチナ料理をふるまってもくれました。カトリック吉祥寺教会ではパイプオルガンのミニコンサートも聞くことができました。いくつかのNPOや企業を訪問、大学の先生やジャーナリストの方々との出会いもあり、実り多い滞在となりました。

しかし東京で有意義な時間を過ごす一方で、彼の心は沈んでいました。来日中も母国で頻発する凄惨な暴力事件。多くの犠牲者が出て（ユダヤ人9人の命が奪われたシナゴグは、彼の自宅からわずか150m先とか）、双方がますます敵対的になっています。和平への展望は全く不透明……。

ヤクープが帰り際に残した一言、「だからこそ今年は『平和の架け橋プロジェクト』を再開して、一人でも多くの若者に『平和をつくる人』になってもらいたい!」。 井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email [ispalejpn@gmail.com](mailto:ispalejpn@gmail.com)

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

当法人のエルサレム現地スタッフ、ヤクーブ・ガザウィが来日、1月28日に東京・四谷の若葉修道院で報告会に臨みました。彼は、当法人がイスラエル、パレスチナの若者を日本に招いて合宿をさせ、交流の機会を作るプロジェクトの初回（2005年）に参加、それ以来、プロジェクトの運営や日本人の若者が現地で研修するスタディ・ツアーの実施を支えてきました。以下に報告会の概要をお伝えします。英語でのトークを、プロジェクト参加のOGである中尾有希さんが通訳しました。

## パレスチナ問題の歴史について

16世紀からのオスマン・トルコの統治下では、アラブ、ユダヤ両民族は共生していました。ところが、オスマンの支配者と仲の良かったユダヤ人大富豪ロスチャイルドが、パレスチナの土地を買い上げてはユダヤ人を入植させるようになり、土地を失ったパレスチナ人との対立が起きるようになりました。そして1920～30年代にユダヤ人の大規模な移民が入ってくると、アラブ人は脅威とを感じるようになり、衝突が拡大しました。

第2次世界大戦後の1947年に国連でパレスチナ分割が決議され、第1次中東戦争でユダヤ人国家とパレスチナ人居住区に分かれた後、第3次中東戦争でイスラエルがヨルダン川西岸とガザを占領。現在、西岸には400万人のパレスチナ人が居住し、31万人のユダヤ人が入植しています。

イスラエルの人口は950万人で、そのうちユダヤ人は700万人、残りがアラブ人などです。

## 学校教育について

**アラブ側**（イスラエル管理下の東エルサレムを含む）

東エルサレムの公立校はイスラエルの管理下にあります。キリスト教、イスラム教の私立学校はパレスチナ式の教育をしており、歴史はパレスチナ人の観点で教えています。識字率は95%で、18～28歳の若者の18%が大学に進み、パレスチナ側の大学では80%がエルサレムとベツレヘムからで、19%がナブルスなど他の西岸地域から。残りの1%がガザからですが、西岸への移動は原則許されていないので、授業はオンラインで、試験を受けるため西岸に行くにはイスラエル治安当局に許可を申請しな



ければならないのが実情です。

## イスラエル側

歴史はユダヤ人の観点で教えています。公立校には一般校とユダヤ教の宗教校があり、私立校はキリスト教、イスラム教など宗教ごとに分かれています。

## 若者の意識・考え

### 大学生

イスラエルではイスラム教徒（ドルーズ派を含む）、キリスト教徒を除き国民皆兵で、18歳から兵役に就くため大学に進むのは21～24歳ごろから。一方のアラブ系イスラエル人には兵役がないので、高校卒業後すぐに大学に行けます。

東エルサレムのアラブ人には学問、高等教育の選択が多いが、定職に就けない人が多い。

民主主義と安全保障のどちらが大切だと思ふかという調査では、ユダヤ人の7割が有事での安全保障を選び、アラブ人では民主主義を選ぶ方が多かった。また、平等感については、ユダヤ人の78%がイスラエル社会に帰属していると答えているのに対し、アラブ側では、学校在学中は平等などについて教えられるせいか、イスラエルへの帰属感が勝るものの、大学生になると60%が疎外感や不平等を感じています。

## 政治・暮らし

イスラエルの選挙におけるアラブ人の投票率は低く、40万人ほどが投票するのに対し100万人以上が投票に行きません。「アラブ政党は何にでもただ反対するだけ」と信頼感が薄く、イスラエル政府に

対しても期待しないためです。

ユダヤ人には極右が増え、若者の50%以上が中道右派～極右で、選挙結果にもそれが表れています。

人生のゴールについて尋ねた調査では、ユダヤ人の場合は経済的成功をあげる回答が多く、アラブ人には高等教育をあげる回答が目立ちました。将来への希望がないので海外への移住を考えると、教育が重視されるからと思われる。

ユダヤ人側では、兵役後にストレスを感じる若者が多いといわれます。銃を取り、考えずに撃つことを教えられることが影響しているようです。

## スタディ・ツアーでの気づき、感動を高校生に伝える

昨年夏にスタディ・ツアーに参加した大学生は、紛争を自分事としてとらえ、自分たちにできることは何かを考えました。そして後輩に体験を伝えたいと、高校での出前授業を企画。第1回として、二松学舎大学附属高等学校のボランティア同好会にお話しすることができました。同好会ご担当の横関彩子先生のレポートを掲載します。

二松学舎大学附属高等学校のボランティア同好会は、社会について広く学び、また自分たちにできる社会貢献を探し、活動しています。2月2日木曜日の放課後に、『イスラエル・パレスチナ、対話をもたらす聖地の平和』という演題で、現役の大学生からお話を伺いました。江口真由さん（上智大学3年生）と三島陽さん（信州大学2年生）は昨年夏にNPO法人「聖地のこどもを支える会」主催のスタディ・ツアーに参加し、紛争が続いているイスラエル・パレスチナを訪れました。現地で見聞きしたことや平和の構築に何ができるのか考察したことをお話ししていただきました。

まず、世界史でも学習しているイスラエル・パレスチナ問題の概略を説明していただき、セキュリティチェックの厳しさや、検問所を通らなければ学校や職場に通うことができない不便さ、常に銃を持った兵士に威嚇される日常、壁の建設などについて、現地の写真を見せていただきながら伺いました。

### パレスチナ紛争について

これは終わりのない報復の連鎖。昨日（1月27日）もエルサレムで、パレスチナ人が銃を乱射して約9人のユダヤ人を殺害しました。祈りの場での攻撃で弁護のしようがありませんが、祖父を殺されたことへの報復といわれています。

これとは別に、エルサレム旧市街ではユダヤ人入植者たちが攻撃・挑発を仕掛け、それがきっかけでアラブ・パレスチナ人の暴動を招く。騒ぎを嫌ってアラブ人居住者が移住するのを狙っているように思われ、現にキリスト教徒の間には移住を望む声が多いです。



イスラエルの徴兵制では男女ともに18歳から兵役が義務付けられていることを初めて知りました。イスラエル人とパレスチナ人は壁で分断されているため、近くに暮らしていても交流する機会がなく、検問所において身分証明書を調べられ、時には銃で威嚇されるという関係のため、平和を構築するのが非常に大変であること。だからこそ、次世代の平和を担う若者を育成するために、客観的な立場の外国人・日本人が交流に参加して、相互理解の仲立ちをすることができるのではないかと述べていました。「一口に『平和』と言っても、それが誰にとっての平和であるかで意味が変わってくる。全ての人にとっての平和を目指すことが必要だ」という言葉が印象的でした。

年齢の近い大学生のお話にみんな刺激を受け、良い学びの機会となりました。

●出前授業を希望する学校関係者の方、当法人までお気軽にご連絡ください。

# イスラエルに最右翼内閣、ユダヤ至上主義色強まる

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

昨年11月1日に投票されたイスラエルの総選挙の結果、右派リクードを中核とする、建国以来最右翼と言われる内閣が成立しました。連立政権に加わる会派の中には、ユダヤ至上主義的主張をしたり、ヨルダン川西岸のユダヤ人入植地の拡張を主張し、パレスチナ国家の創設に反対したりするものもあります。

## 最右翼政権と呼ばれる訳は？

首相に返り咲いたネタニヤフ氏が率いる内閣が「最右翼」と呼ばれるのはなぜか。右翼とは保守的・国粋主義的な思想傾向を指します。連立与党の各党派の主張を見てみると。

国会の120議席中32議席を獲得した第一党の「リクード」は、建国以来政権を担い続けた左派の労働党に対抗して保守的、ユダヤ民族主義を強調する傾向があります。「シャス」（11議席）、「ユダヤ教連合」（7議席）の宗教政党は長年、ネタニヤフ政権の右派連合を支えてきました。

内閣の性格を大きく左右しそうな会派は「宗教シオニズム」（14議席）で、三つの党で成り立ちます。

その一つ「宗教シオニズム」は、ユダヤ教の教育強化を掲げ、ユダヤ至上主義的主張が強いほか、同性婚に反対。パレスチナ問題では、ヨルダン川西岸の全てか、C地区と呼ばれるイスラエルの管理下にある地域の併合を主張しています。

「ユダヤの力」は反アラブ色が強く、ベングビール党首は非合法化された「カハ」という人種差別的な極右政党にいたことがある人物。西岸の併合を望み、二国家共存による和平に反対する政党。

もう一つの「ノアム」は、やはりユダヤ至上主義的で、同性愛などLGBTは「家族を破壊する」として、強く反対しているのが特徴です。

「ユダヤの力」のベングビール党首は警察を管理する国家安全保障相に任ぜられましたが、同党首はアラブ、パレスチナの抗議行動には強権で臨むよう主張し、かつてアラブ人のデモ隊に発砲したこともあります。また、西岸のユダヤ人入植地の拡大を主張する「宗教シオニズム」のスモトリッチ党首は財務相に就任、入植地建設の権限を与えられました。この人は「産院で、将来テロリストとなるアラブ人の赤ん坊の隣に、ユダヤ人の赤ん坊を寝かせたくないと思うのは



ベングビール党首



スモトリッチ党首

自然なこと」と、反アラブ感情を正当化する発言をしたと伝えられています。

「リクード」と二つの宗教政党もユダヤ至上主義的傾向と反パレスチナ色を強めてきましたが、「宗教シオニズム」の三党ほど露骨ではありませんでした。

以上のように強硬な反アラブ・パレスチナ、性的マイノリティーの否定、ユダヤ至上主義で二国家共存に反対する政党を抱える内閣に対して、民主主義の危機を懸念する国内から、また、パレスチナ和平の崩壊を懸念する国外から反発が向けられています。15年の首相経験を持ち、多様な主張を持つ連立与党をさばいてきたと自負するネタニヤフ首相は、極右勢力を抱えることの危うさを理解しており、対処できると自信を持っているようですが、連立存続のキャストイングボードを握る極右党派を制御できるかどうか。

## パレスチナ側先鋭化が影響？

今回のように極右勢力が伸長したのはなぜなのか。イスラエルでは近年、ユダヤ人国家を強調し、治安を優先してパレスチナ和平には無関心な傾向が強まり、それが国会の議席にも反映していたのは確かですが、極右勢力が急に膨張したように見える背景には、パレスチナ側に武装闘争の機運が高まっていることがあるのかもしれませんが。

イスラエルでは2019年以降、ヨルダン川西岸への武器密輸が報じられるようになっていました。一つには、シリア南部に勢力を伸ばしたイランが、ヨルダン経由で西岸に銃器などを送り込んだとの情報があります。ガザのパレスチナ自治を実効支配するイスラム原理主義組織ハマスも、西岸でも強化する狙いがあるとの見方があります。22年には、イスラエル国内のアラブ人住民が、ヨルダンから武器・弾薬を持ち込んだのをイスラエル治安当局が摘発した、との

ニュースがあります。

そんな中、西岸ではパレスチナ自治政府とも、ハマスの宗教勢力ともつながりのない「ライオンの巣穴」という武装集団が生まれました。西岸第二の都市ナブルスで去年8月、イスラエルによる治安出動が強まる中で結成されたものです。武力によるイスラエルの占領からの解放を旗印に、イスラエル兵殺害などの襲撃を実行。襲撃の様をSNSで流して、パレスチナ人の若者を中心に共感を広げていると言われています。

ここで思い出すのは、筆者がオスロ合意前の占領下のパレスチナを訪れた時のことです。日本人（東洋人）の私を見ると子どもや大人までもが「カラテ」と声をかけてきました。武装したイスラエル兵の前でなす術もなく屈服させられる現実の中で、当時はやったカンフー映画の主人公ブルース・リーが、武器なしで敵をやっつけるのを見て、空手にあこがれていたのでしょう。

それが、イスラエルとの自治合意で警察権を得、銃を手にするようになって、力でイスラエルに対抗できるという勘違いが生じました。しかし、強大なイスラエルの武力に叶うわけはなく、2000年からの第2次インティファダ（抵抗闘争）はねじ伏せられました。

とはいえ、若者たちにはその教訓よりも、建国の見通しはなく占領下の窮状改善も一向に進まず、パレスチナ自治政府にもハマスにも事態の打開を期待できない現状への不満の方が強いのでしょうか。しかし、武力には限界があり、しかもイスラエル側の治安重視の傾向をさらに強める逆効果も招くのではないかと危惧されます。現に1月26日、西岸最北端のジェニンでイスラエル治安部隊が難民キャンプを急襲、武装組織イスラム聖戦のメンバー9人を殺害しました。テロ攻撃を準備していたという名目です。これに対しガザ地区からイスラエル領内にロケット弾が発射され、イスラエル軍がガザ地区を空爆する対抗措置をとりました。一方、27日には東エルサレムのユダ

ヤ人入植地で、パレスチナ人が礼拝に来ていたユダヤ人に銃を乱射し、10人を死傷させる事件も起きています。さらに28日にも、エルサレム旧市街の南に位置する地区で、イスラエル人の親子2人がパレスチナ人の少年に銃撃され、負傷しました。

## 極右の主張を抑えられるか？

このような情勢の中、イスラエルの警察を管轄する国家安全保障相を任されたベングビール氏が1月3日、エルサレム旧市街にあるイスラム教の聖地「ハラム・アッシャリーフ」を訪れました。この場所はユダヤ教徒にとっても「神殿の丘」と呼ばれる聖地ですが、聖地管理の取り決めで礼拝ができるのはイスラム教徒のみとなっています。彼が党首を務める「ユダヤの力」は、ユダヤ教徒にも礼拝を認めるべきだと主張しているのです。

この聖地は2000年9月に、当時は野党だった右派「リクード」のシャロン党首が訪問を強行してパレスチナ人の反発を招き、前述の第2次インティファダにつながった困縁の地です。ベングビール氏の行為は、挑発的な危険なものと言えます。

この聖地訪問に対しては、イスラム教聖地の庇護者を自認するサウジアラビアが厳しく批判したほか、2020年にイスラエルとの国交を正常化したアラブ首長国連邦も批判しました。宗教的対立につながりかねない聖地の現状変更に反対する米国や英仏両国の在イスラエル大使館は懸念を表明し、パレスチナ自治政府やイスラム教原理主義組織ハマスはもちろん、激しく非難しており、暴力的対立の激化が心配されます。

発足早々、西岸の入植地拡張や占領地のイスラエルへの併合を主張する極右政党を取り込んだ連立政権への懸念が、国内外から示されており、ネタニヤフ首相は極端な政策は取らない方針を表明して火消しに努めています。こうした圧力が、対立激化を防ぐことにつながることを願いたいものです。

## 映画「愛国の告白 沈黙を破る Part2」監督 土井敏邦さんを囲んで

佐藤真紀（当法人アドバイザー）

昨年暮れに、土井敏邦監督によるドキュメンタリー映画「愛国の告白 沈黙を破るPart 2」が公開

されました。

「沈黙を破る」とは、占領地に赴いた経験を持つ元

イスラエル将兵たちが立ち上げたNGOで、占領地で自分たちが犯した虐待や、略奪、一般市民への殺戮等の加害行為を告白し、イスラエル社会が占領と向き合うべきだと訴えています。

2005年から土井さんはこのNGOを取材し、2009年に映画「沈黙を破る」を劇場公開して注目を浴びました。しかしその後「沈黙を破る」は、ネタニヤフ政権とユダヤ入植地団体、右派、極右勢力からの激しい非難・攻撃にさらされています。それでもイスラエルのモラルを崩壊させないように真実を告白し続ける彼らを追いかけた続編が、「愛国の告白 沈黙を破るPart 2」です。土井さんは、「この映画は、かつての旧日本軍がアジアを占領し、残虐な行為を犯してしまった事になぞらえ、『遠いパレスチナ・イスラエル』の物語に終わらない私たちの社会の在り方、また私たち自身の生き方をも映している」と言っています。

私は、1997年から2002年までパレスチナに滞在していて、土井さんには何度かお会いしイラク戦争、福島取材でも現場で一緒にいる機会がありました。

当法人が、スタディ・ツアーと『平和の架け橋プロジェクト』などの平和交流に参加する日本の学生たちの事前学習で、「Part 1」を鑑賞してから、実際に兵役を終えたイスラエルの若者たちと交流しているという話を聞き、一体どんな事をやっているのか、ずっと気になっていました。

交流に参加した日本人が、その後何を思い、どういう風に成長していくのか、井上さんの言う「平和の働き人」とはどういう人たちなのか興味がありました。そして昨年暮れに「Part 2」が完成したというので、さっそく見に行きました。170分という長尺の映画ですが、長さを感じない作品でした。民主主義は「数さえそろえば正義になる」という構造的な暴力があり、いじめにつながりやすい側面もあります。「沈黙を破る」の若者たちが、まさに今のイスラエルでいじめられているのだと思いますが、そんな中でも頑張っている姿を見て、勇気のようなものを貰った気がしました。そして、この映画を作ってくれたことへの感謝の気持ちもあり、若者たちと土井

さんの座談会を企画することになりました。

## 長くかかわることでパレスチナから学んだもの、それが財産だ

ジャーナリストとして仕事をする限り、戦争が起これば、シリアとかウクライナにも行くわけですが、土井さんは34年間一貫してパレスチナにこだわって取材を続けてきました。

「かわいそうだから行くんじゃない。出会った人がそこで必死になって生きてる、人間がこんなにひどい状況の中でどうして生きられるんだろう、どうしたら周りの人にやさしくできるんだろう、家族って何だろう、生きるってなんだろう、などパレスチナに長くかかわることでいろんなものを学びました。それが宝です。」

この座談会には、当法人のスタディ・ツアーと『平和の架け橋プロジェクト』参加後、現在もパレスチナ問題にかかわり続けている人にも参加してもらいました。

金森早紀さんは、学生時代からパレスチナ難民問題に関心があり、ラマッラーの日本政府代表部で働いた後イギリスの大学院に留学中です。

イスラエルから参加してくれた原田直美さんは、青年海外協力隊でアフリカに派遣され、帰国後もこの地域が気になり、現在ハイファ大学で平和構築学を専攻しています。

ヨルダンから参加してくれた植田陽香さんは、現在外務省に所属してアラビア語を研修中です。

彼女たちもこれから長くかかわって「宝」を作ろうとしているんだなあと思いました。

## イスラエル史上最悪の政府

やはり参加者が気になっていたのは、右傾化するイスラエルです。土井さんは、「イスラエル史上最悪の政府だって思っています。ネタニヤフ自身汚職とかいろいろな問題を抱えているので、とにかく自分の身を守るために首相になって政権を維持したいと思っています。僕が怖いのは、そのために、『パレスチナ人は追い出せ、殺せ』っていうことを平気で言うような、いわゆる極右政党と手を組んで政府を作っ

てることです。

この新政権で西岸地区の併合がものすごい勢いで進んでいく。〈二国家共存〉はすでに絵空事で、パレスチナ人は居住権はあっても国籍はない、選挙には参加できないというような、本当にもう最悪の事態になっていくと思います。私の映画に登場したような左派の人たちもどんどん追い込まれていく。全然明るい展望は見えない。この前「沈黙を破る」の代表とSkypeで話をしたけれども、『おそらく組織自体が潰されかねないような事態になると思う』と言っていた。」と解説されていました。

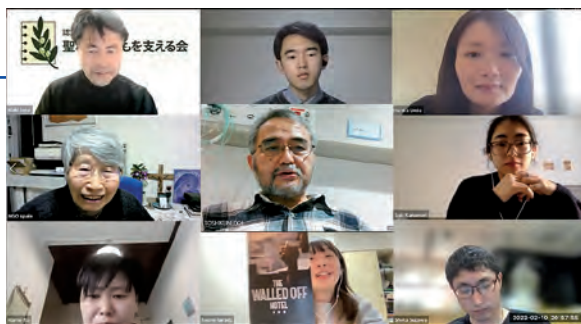
植田さんは、「先月のイスラエルとパレスチナの衝突の時に、友人のイスラエル人が、『パレスチナ人はテロリストである、アラブ人はテロリスト、それ見たことか』みたいなことを結構SNSで書いて拡散している。その中には、当法人のプロジェクトに参加したことがあるユダヤ人もいて、正直本当に悲しいんです」。

### 友だちになっても「構造」は変えられない？

8月にスタディ・ツアーに参加した高橋彩子さん(大学4年生)は、あらかじめ質問を送ってくれました。

「当法人のプロジェクトに参加して、一人ひとりが友だちになれるという部分は確信できたけど、じゃあ友だちになった先に何が起こるのかという部分についてははっきりしませんでした。友だちになったとしても、大きな「構造」については議論や変化が起こらないからだと思います。私は草の根の交流が最初の一步であると思っているのですが、二歩目以降のアクションについては全くイメージが湧かず、一对一の友情は結局何にもならないのかとってしまうことがあります。もっと大きな「構造」について考えられる環境に発展させるには、何が必要だと思いますか。」

土井さんは言いました。「占領という大きな構造を全く無視して、『個人と個人が仲良くなれば平和が来る』という非常にナイーブな考え方で、パレスチナ・イスラエル問題を語る事がどれだけ危険か。出発点はいい。彼らと出会うことで皆さん方が意識を持つ。しかし、『こういう人たちがいて、こういう問題を抱えてるんだ、パレスチナ人とイスラエル人



はいろいろ議論しながらもみんな最終的に握手した、これでパレスチナ・イスラエルの問題が解決した』というふうに思うんだったらとんでもない話です。一番大事なのは現場へ行くことですよ。大切なことは、彼らが自分と同じ人間なんだということを経験で、体で知ることです。この問題に関わったことで自分はこんなに成長させてもらったんだ、こういう人と出会って自分が考えてた平和よりもっとリアリティのある平和を自分は学んだと。それは、パレスチナ問題を超えて、皆さんが違う道を歩いた時に絶対に肥やしになるし、土台になっていく。もっと肩の力を抜いて、対話することで自分は今まで考えなかったことを考えさせてもらったとか、そういう風な発想で良いんじゃないかな。」

座談会では、土井さんのパレスチナの取材への情熱が伝わってきました。そしてスタディ・ツアーや『平和の架け橋プロジェクト』に参加した若者たちが、それをきっかけに、次のステップに進んでいて、蒔いた種を咲かそうとしている姿も見ることができて希望を感じる事もできました。

ここで、紹介したのは本座談会のほんの一部です。HPで動画なども配信していく予定です。

また、4月から始めようと企画している「イスパレ大学」では、イスラエルやパレスチナからもOB/OGを迎えて、いろいろなテーマを掘り下げようと思います。HPやSNSでお知らせしますので、ご期待ください。

### 支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- \* 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- \* 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- \* いつからでも、いくらからでも簡単に始められます！

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**  
または **042-636-9218** (中山)

## 楽しい学校生活

ラサール校・学校生活の一コマ。  
理科の授業、レクリエーション、クリスマスのお祝いなど。



## ヤクーブ・ガザウィ、日本での日々



募金に使うコーヒーのテイस्टング。



東京・吉祥寺教会でのパイプオルガンコンサートを終えて。

## 「分離の壁」内側のイラスト (ベツレヘム)



アンネ・フランク  
In spite of everything, I still believe people are really good at heart.  
『いろいろなことがあっても、みんな心ではとても良い人たちだと信じています。』



穴からのぞき見ているつもりの憧れのエルサレム！  
実際にはわずか8km先なのに一度も訪れたことのない若者が、ベツレヘムには多い。



「注意！子どもたちが有刺鉄線で遊んでいる！」



聖母マリアと幼きイエス、抵抗運動を呼びかける落書き。



矢加部真怜さん、トルコ・シリア大地震緊急支援のため被災地へ！

ピースウィンズ・トルコ・シリア緊急支援はQRコードから



お問い合わせ：0120-252-176

矢加部さん(写真右)は当法人のプロジェクトやスタディツアーの参加者で、現在、NPO国際支援団体「ピースウィンズ・ジャパン」で活動しています。ガザ支援のためエルサレムへ派遣されていた彼は、日本への一時帰国の予定を変更して被災地に入り頑張っています！トルコ語も堪能な彼は被災者救援に大きな働きができると期待しています。

皆様、トルコ大地震被災者に援助いただければ幸いです。ご寄付は右上のQRコードから。

写真撮影 三島 陽、佐藤真紀、ヤクーブ・ガザウィ、クレール・ガザウィ